

ポーランド・モダニズム文学論争(1) : プシェス ムイツキの文学論について

西野, 常夫
九州大学比較社会文化研究科日本社会文化専攻・文化構造講座

<https://doi.org/10.15017/8558>

出版情報 : 比較社会文化. 1, pp.23-28, 1995-04-28. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :

ポーランド・モダニズム文学論争(1)

——プシェスミツキの文学論について——

西野常夫*

キーワード：芸術至上主義，美，大衆

はじめに

19世紀末、欧州各国は経済発達度や市民社会成熟度はまちまちであったが、文学の領域では互いに相通じる傾向がみられた。デカダン、モダニズムなどと呼ばれる新しい潮流がそれであり、いわば下部構造から独立した文化様式として自在に拡散し、定着した観があった。ポーランドは当時、プロシア、オーストリア、ロシアの三国による分割統治の最中であり、各ブロックは多かれ少なかれ宗主国の言語・文化の影響下にあった。たとえば、プロシアおよびオーストリア支配の地域では、ドストエフスキイはおもに独訳で読まれた。しかし、この外来の新潮流に限ってはそういう文化の垣根を意に介さぬように一様に浸透し、ポーランド文学をヨーロッパ文学の一部に組みこんでいく役目を果たすことになった。

新しい文学潮流が流入する時はいつもそうであるが、当時のポーランドでも、船来思想の賛美者、あるいはその宣伝普及に奔走する者が存在する一方で、他方には反発者、あるいは新しい思想のあら捜しに努める者が出現し、この時代は双方の文化的勢力争いで活気に満ちた興味ある様相を呈した。本稿ではこの時代にまきおこった文学論争を概観し、新しい文学が成立していった過程の理解の一助としたい。

世紀末の有力な文芸思潮としてはまずショーペンハウエル、ニーチェのドイツ哲学とボードレール、ランボー、マラルメなどのフランス象徴派があげられようが、この両者をポーランドに紹介するに足る語学力、精力的な活動力、また新しい葡萄酒は新しい皮袋にということばどおり、既存の文壇勢力に気兼ねなく「新しい芸術」を発表できる新しい機関誌を創刊する編集者の才などが所望されたが、ゼノン・プシェスミツキ(おもな筆名ミリアム)はこうした条件を満たした人物であった。彼は雑誌の刊行のために

自腹を切ることもあった。

1. プシェスミツキの文壇登場

詩人、翻訳家、文芸評論家、雑誌編集者など多くの顔をもつプシェスミツキの文壇との最初の関わりは詩であった⁽¹⁾。1884年に他の作家との共著作品集『自由の時より。文学作品撰集』が刊行され、さらに同書から選別した詩とその後の詩をあわせた自作詩集『青春の魅惑より。魂の抒情の回想録(1881-1891)』が1894年にウイーンで刊行された。後者収録の詩「雰囲気」(原題は初出ではポーランド語の *Nastroj* であったが、詩集編纂時にドイツ語の *Stimmung* に変更されている。西側からの思潮の流れを率直に全面に押し出したと考えられる)などは世紀末の新しい詩のスタイルを伝えるものである。

雰囲気

ああ 都会の風の吹く憂鬱な晩方、
砂ぼこりが石だたみの上を舞うと、
あたりを闇がおおい、街灯がバツタのように跳ねる。
通りは人影もなく、洞穴のようだ。

おまえはひとり、ふらふらとさまよう。病的な空想のなかで、

おまえの想念は不思議な幻の群れをあやす。
おまえは自分を呼び出しの靈魂だと感じる。
大衆はあわてておまえから遁走する。

そして、闇はしだいにおまえの靈魂にしみこみ、
その衣ですべてを消し去り、押し殺し、
そして、巨大な虚無がおまえの体内にひろがる。

*日本社会文化専攻・文化構造講座

生活を金色に染める幾多の夢も鳥のように飛び去る。
おまえは頭をうなだれて、思わずつぶやくのだ。
「すべては、いったい、なんのために？」

19世紀後半のポーランド文化が非常に惨状にあるという後述のプシエスミツキの主張は過激なきらいがあるが、実証主義支配下の当時の文学が芸術的な香りといったものにやや欠けていたことは不定できないだろう。新しい文学の形成に外国文学の流入と刺激が不可欠であったポーランドで翻訳は文学者の重要な仕事であったが、プシエスミツキはその要請に応え、つとにフランス語とチェコ語の翻訳を始めている。とくに同時代のチェコ文学への興味は深まり、1880年にはワルシャワのチェコ協会事務局長となり、83年、84年にはヴルフリツキー (J. Vrchlický) の悲劇『ドラホミーラ』と詩集『魂と世界』をポーランド語訳で刊行した。またヴルフリツキーのほかにブジェジナ (O. Březina)、マハル (J. Machar)、ゼイエル (J. Zeyer) などとも親交し、1885年にはネチャス (J. Nečas) によるプシエスミツキの詩のチェコ語訳がプラハで刊行されるにいたった。

プシエスミツキはヴルフリツキーが編んだ『最近のフランス詩』および『フランス詩概観』によってフランスの詩の状況を把握し、とくに後者を1888年から後述のワルシャワ「生活」誌に訳載して総勢55人のフランスの詩人をポーランドに紹介した。当時「ポーランドではフランスで起こったことが忠実に模倣された」とチェスワフ・ミウオシュがいつているが⁽²⁾、モダニズム文学運動の旗手としての翻訳家プシエスミツキの功績を考える場合、とくに重要なのはフランス文学の紹介である。そして、その仕事を始める契機となったのはチェコの文学者との交友であった。

2. 「われわれの意図」(ワルシャワ「生活」誌, 1887年1月)

西側の新しい文学をポーランドに移植しようと考えていたプシエスミツキにとって大きな転換期となったのは、ワルシャワの週刊文芸雑誌「生活」の編集長就任である。プシエスミツキがそれまで翻訳、文芸時評その他の発表機関としていた新聞、雑誌には「毎日新聞 (Kurier Codzienny)」, 「木蔭 (Bluszcz)」, 「草の穂 (Kłosy)」, 「週刊 流行と小説 (Tygodnik Mód i Powieści)」, 「書誌通信 (Wiadomości Bibliograficzne)」などがあつた。ワルシャワ「生活」誌は月刊「書誌通信」(1882-87)の廃刊にともない、同じ経営者テオドル・パプロツキーによって創刊されたもので、文学専門誌の性格をもち、「芸術の神アポロンの正しき信奉者のために安全な港を開く」ことを

信条とした。ポーランド最初の反実証主義文芸誌の編集に携わる苦勞をプシエスミツキはヴルフリツキー宛のクリスマス・カードで次のように語っている。「『生活』誌の編集を依頼されました。あなたがたの「ルミール」誌や「花」誌と同様、文学を中心としたものになるでしょう。文学とくに詩は今日わが国の出版界では隅に押しやられて、惨憺たる状況です。アスヌイクのような詩人も、うんざりして沈黙してしまいました(中略)。あなたは経験から編集の仕事がどういふものかおわかりでしょうが、まったく新しい建物を建てるとなると仕事は倍増します。ようやく創刊号が出て(中略)一息ついているところです」(1886年12月24日)⁽³⁾。創刊号に掲載された「われわれの意図」(署名なしであるが、プシエスミツキの手になるものと考えられる)は、同誌刊行の辞の体裁をとっているが、同時に、自前の機関誌を得た新世代の旗手の、旧世代に対する公開挑戦状ともいえるものである。

「われわれの意図」の論旨は次のようにまとめられる。

1. ポーランド社会⁽⁴⁾の芸術的要求は物質的要求および精神的要求に劣らず強い。そして芸術的要求は後二者と密接な関係にある。にもかかわらず、ある時期から芸術とくに文学が軽視されている。たとえ物質的に満たされても、文学のもつ美の光が社会の精神の道しるべとなって輝かない限り、社会は物質的恩恵を人々の合意のもとに享受することはできない。
2. ワルシャワ「生活」は美を旗印に掲げる。しかし、その美は純粋な美であり、あまりに偏向的また傾向的なものは排除する。ただし、美しいものであれば、それぞれの観点や信念のちがいは許容する。
3. 文学における美とは生活の真実の過去・現在における様相の調和のとれた反映である。美的な作品は、人間を環境からだけでなく、生理的・心理的・精神的側面から把握する。正確な観察とともに、創造性のある空想力、地上から切り離されたような天才的な観念的発想も重要である。つまり、具体的な時と場所の特徴(時代性)も必要だが、同時に永遠不変の要素もふくむべきである。後者は個人や社会に継承、保存されているもので、古今の偉大な作家が表現してきたものだ。これは、調和的な形式とともに、美の必須の要素である。以上の美の観点によって、ワルシャワ「生活」は掲載する作品を選択する。
4. ポーランドの作品を中心とするが、読者の美的趣味を洗練し、文学的視野を拡大せしめるという啓蒙的役割の意味で、ポーランドでは知られていない西側の新しい文学も紹介する。
5. 今日の新旧両世代の争いは行き過ぎで、社会に混乱を引き起こし、悪影響を及ぼしている。ワルシャワ「生活」がくみするのは、進歩主義者であれ保守主義者であ

れ、すべての誠実な仕事をしている者、社会のことを真剣に考えている者である。

3. 「ヒメラ」誌の立場

芸術と社会の関係についてのプシェスミツキの考えの基調は「われわれの意図」に表明されたとおりで、以後の芸術と社会の関係をめぐっての論争の種はこの時すでに蒔かれたといえる。しかし、具体的な賛否の声があがるには今しばらく時が熟す必要があった。

プシェスミツキは1888年6月にワルシャワ「生活」誌の編集長を辞任し、同誌は1891年に廃刊となる。その間、外国文学の紹介としてはゲーテ、バイロン、シェリー、ユーゴー、ボードレール、シュリー・プリュドム、スウィンバーン、ロッセティなどがあり、国内からはマリア・コノプニツカ、ヤン・カスプロヴィチなどの有力作家が寄稿した。プシェスミツキの後任ジェントコフスキの代から保守勢力と「新しい芸術」派の宥和、折衷ははかられ、作品選択が発刊当初の基準から逸脱していったとされるが、ポーランド文学に新しい気風を吹きこみ、「若きポーランド」への道を切り開いたという点で意義のある文学雑誌であった⁽⁶⁾。この間、プシェスミツキは1889-1900年にパリ、ウィーンに数回滞在し、「メルキュール・ド・フランス」その他の影響力のある雑誌を通覧するなどして、当地の最新の文学状況を自分の目で確認した。

1901年、20世紀を迎えるにふさわしいモダンな月刊誌「ヒメラ」（1901-07年、1903年と1906年に一時断絶）がワルシャワで創刊され、編集長にプシェスミツキが就任した。この雑誌は編集長を同じくしたワルシャワ「生活」誌の衣鉢を継ぎ、ポーランド・モダニズム文学の根城となった。西側のロマン派、高踏派、象徴派はもとより、ニーチェやキェルケゴールなどの思想、あるいはイギリス、スコットランド、スカンディナヴィア、スペイン、フランスのプロヴァンスの民謡までをふくむ紹介領域の広さはややもすると編集部の方の見の欠如を思わせるほどであるが、ポーランド文学の閉塞状況を強く意識するプシェスミツキにしてみれば、外国の文芸思潮の奔流がとにかく活力を与えてくれると期待した、ということだろう。ポーランドの作家では1898年にドイツから帰国してクラクフ「生活」誌（1897-1900）編集長をつとめ終えたプシビシエフスキさらにベレント、ジェロームスキ、レイモント、ヴィスピアンスキ、スタッフなどが寄稿した。

その陣容と息の長さから「ヒメラ」誌の影響力の大きかったことは容易に想像できるが、それだけに風当たりも強かった。同誌第2号に掲載したプシェスミツキの「芸術との闘い」は賛否両論を引き起こした。これに先立ち、プシェスミツキはワルシャワ「生活」誌創刊時と同様、「ヒメラ」誌の刊行の辞を発表している（「内容広告」）。論旨はやはり「われわれ

の意図」と重複する部分が多く、社会と芸術に対する作者の考えが変化していないことがわかる。すなわち、理想なき現実主義、物質万能主義に甘んじる社会ならびに高尚な芸術を疎んじる時代への批判、真の芸術と似而非芸術の区別の必要性、読者の美的センスを涵養し、新しい才能に刺激となる作品を掲載するという編集方針などが述べられた⁽⁶⁾。注目されるのは、「問題を紛糾させる美的感覚（poczucie piękna）」という概念を芸術から排除しようとするトルストイに対する揶揄であろう⁽⁷⁾。周知のようにトルストイの『芸術とはなにか』はロシア国外でも大きな反響を引き起こした。ポーランドではロシア語版原著の出た1898年に早くもA.ポトツキによるポーランド語訳が出ている。掲載誌は「ヒメラ」誌とならぶモダニズム文学の拠点であったクラクフ「生活」誌（1897-1900）であった。これをうけて、『芸術とはなにか』に対する批評文が同年のうちに少なくとも4編あらわれ、A.J.コーンによる完訳本が出る1901年には10編を越えた⁽⁸⁾。『戦争と平和』および『アンナ・カレーニナ』の作者の名声がすでにヨーロッパを席卷していたとはいえ、ロシアのリアリズムの巨人が書いた芸術論に対するポーランド文壇のこの興味のほどは、つまりは、ちょうど当時のポーランド文学が真の文学の要素を模索していたということである。

「われわれの意図」、「ヒメラ誌内容広告」などにおいて真の芸術のあるべき姿を宣伝してきたプシェスミツキは、「芸術との闘い」（「ヒメラ」誌、1902年2月）においてさらに詳細に持論を展開した。この論文は新旧両派に幾多の議論を呼び起こすことになった。

4. 「芸術との闘い」

この論文は、芸術家よりも企業家や産業資本家を大切にしたいほうがポーランドのためになるというボレスワフ・ブルース、ユリアン・オホロヴィチらの意見に対する反論として書かれた⁽⁹⁾。「芸術との闘い」とは芸術の深遠な価値を理解できない社会勢力が芸術を打倒し、消滅させようとしている趨勢をいったものである。プシェスミツキはこうした社会勢力の起源を歴史的社会学的に叙述しようとした。その試みは実は先行する小論「天才たちの運命」（「ヒメラ」1901年1月）⁽¹⁰⁾にすでに見ることができる。「天才たちの運命」では、パリで死に、19世紀末までほとんど顧みられずにいた詩人ツイプリアン・ノルヴィド（1821-1883）の薄幸の運命がライト・モチーフになった。（プシェスミツキはノルヴィドの作品の発掘者であった）。フランスではヴェルレーヌが『呪われた詩人たち』を書いて、世に容れられぬ過去または同時代の詩人たちを列挙し、その紹介につとめたが、プシェスミツキの真の目的は新しい文学の宣言にあった。

「天才たちの運命」によると、

フランス革命は平等の原理をかかげ、階級差別を廃し、同時に特権的な身分の人々ももっていた高度な精神文化を打倒したが、差別から解放された人々に高度な文化を付与したわけではなく（中略）、貴族を百姓化した（schłopiła）が、民衆を高尚にはしなかった。（中略）民衆が手にしたのは、以前より快適な生活を願う平凡な欲求心と浅薄な嫉妬心であり、また、彼らには不可解な魂の羽ばたき、飛翔といったものに対する嫌悪感である。⁽¹¹⁾ プシェスミツキはフランスのパルナツシャン（高踏派）の支持者であったゆえか、「少数の選ばれた者のための芸術」が貴いとする考え方や大衆蔑視の傾向がかれの論調に影を落としているように思われる。そして、その結果（社会学に対するたんなる無知の結果というよりも）生じたと思われる論理のひずみが、旧世代だけでなく、新世代からも批判されることになった。

それはともかく、同論の趣旨は、時代が下り、民主主義が普及し、物質万能主義に生きる大衆（tłum）が社会的に勢力をもち、その結果、才能ある芸術家も名声を勝ち得るために、己を低くし、大衆に妥協・迎合した作品を制作するという嘆かわしい事態が発生しているというものである。

「芸術との闘い」では、大衆と創造的人間（jednostka twórcza）の相違について述べられる。

精神が普遍化つまり存在全体（całość bytu）への到達をめざすのに対し、肉体は個別化つまり、単一の世界から個々の現象を分離することをめざす。大衆においては肉体が決定的な優位をたもち、創造的人間においては精神が活躍する。知的あるいは芸術的運動はいずれも自然発生的なもの（spontaniczność）と惰性的なもの、精神と物質、創造と習慣、普遍性と個別性（あるいは現象）、無限性と有限性の闘いである。⁽¹²⁾

ここでいう自然発生的なものとは、プシェスミツキによれば、人間が本来、精神のなかにもっている永遠と無限性へのあこがれであるが、一時的な事情によって精神のなかで眠りこんでいるのだという。創造的人間は永遠的なものを回復するために不断に闘争しており、大衆のなかの精神が目を見ます精神優位の時代を準備する。こうして、物質優位の時代が終焉し、精神優位の時代がおとづれるが、いまだ大衆の理解をえられない時期の運動の先駆者は激しい矢面に立たされ、やがて忘却に付されるのに対し、先駆者が敷いたレールの上に乗っかる後続の芸術家は大衆の支持を勝ち取り、著名作家としてもはやされる、というのが皮肉な歴史の実情である。しかし、こうした著名作家たちもやがて、大衆に迎合しはじめ、物質優位の時代を招来することになる。プシェスミツキは以上のように考えた。

5. プルース「頹廢化した世論—および—進取の精神の人々に対する軽蔑」⁽¹³⁾

当時の実証主義陣営の諸評論文のなかで、とくに注目したいのはプルース（1847-1912）の「頹廢化した世論—および—進取の精神の人々に対する軽蔑」（「毎日新聞〈Kurier Codzienny〉」1901年5月26日）である。

プルースは小説家として非常な名声を博したが、時事評論（kroniki. フランス語の chroniques に相当）によっても大衆の広範な支持を勝ちえた。正確さ、厳密さへの嗜好と相まって、労働大衆を直接見るために冶金工場に勤めたという経験が示すように実地主義の筋金入りの作家であり、同じ実証主義陣営のシフェントホフスキを現実の認識不足と批判したほどであった⁽¹⁴⁾。プルースの文章にはさらにユーモアがあった。ユーモアは読者の興味を引きつけ、無理なく啓蒙していくという所期の目的に適していたし、またユーモアを駆使した韜晦戦法はロシア政府当局の検閲に対しても有効だった。プルースの時事評論はワルシャワの各種雑誌新聞紙上で約40年間読まれ続けることになった。新しい世代に属し、「ヒメラ」誌という有力雑誌に陣取ったプシェスミツキにとって、旧世代の代表者プルースは手ごわい相手だったはずである。

この論文でのプルースの主な論点は、いかに殖産興業の精神をポーランド国民の間に根づかせるかということだった。芸術の問題が出てくるのは、「新しい芸術」なるものの移入がポーランドの進歩を妨害するのではないかという文脈においてである。

プルースはまず、シフェントホフスキが創刊した実証主義の有力雑誌「真実」（1881-1915）に掲載された啓蒙作家ヴワディスワフ・ウミンスキの論文「我が国の発明家たち」⁽¹⁵⁾を同じ問題を扱った先行論文として引用し、完全な同意を表明する。すなわち、世界中で工業生産競争が始まり、英独米などが互いにしのぎを削っているのに、ポーランドでは進取の精神を育てることもせず、実業家も発明家もないが、その理由は1.人間が軽蔑され、2.実験をおこない、発明を促す研究施設が不足し、さらに3.世論が最高の創造活動は芸術作品の制作であると思ひこみ、科学技術や工業を軽視しているからだ、と述べる⁽¹⁶⁾。

ポーランド実証主義は、ロマン主義に突き動かされた対ロシア独立運動（最後の蜂起は1963年1月）の失敗後に起こった運動で、主たる目的はもはや政治的独立ではなく、国民の啓蒙と経済の発達にあった。その名から推測できるようにコントの実証哲学が基礎にあるが、それにもましてスペンサー、ミル、ダーウィンの思想の影響が大きい。簡単にいえば、今や科学の時代であり、科学と経済の発展にあらゆる希望を託すべきだという考え方である。生物が多

くの部分や器官から成る有機体であるように、社会という有機体も構成員の労働の調和によって成立する。この考えによれば、個人の利潤追求も結局は社会を裕福にするとして是認された。ロシア領ポーランドでは1870年ごろから工業化が進むが⁽¹⁷⁾、実証主義は資本主義の発達を促進したといえる。

1892年にロンドンで出たポーランド語版『共産党宣言』の序文でエンゲルスは、ポーランドの工業の発達速度がロシアを凌駕していると認め、また「ポーランドの工場主とロシア政府にとって不都合なことに、ポーランド労働者の間に社会主義思想が急速に普及し、『共産党宣言』に対する需要がますます高まった」とことわっている⁽¹⁸⁾。マルクス、エンゲルスらの科学的社会主義の影響は大きく、1893年にはロシア領ポーランドでポーランド社会党とポーランド王国社会民主党が結成された⁽¹⁹⁾。実証主義者たちは、労働者の諸権利を守るためには資本家とも闘うべきだと考えたが、それでも、政治闘争や武力衝突によって文化的遺産が消滅するのをおそれた。その文化的遺産とは主に有産階級によって保持されていると、彼らは考えた⁽²⁰⁾。たとえば、シフェントホフスキは資本主義を「人間を踏みつぶす獣」よばわりしたが、それでも「各人が自分の計画を放棄し、命令された思考基準に適應するのを余儀なくされる」社会主義よりはまだしも望ましいと考えた⁽²¹⁾。ただし、実証主義者たちの次の世代は、彼らのマルクス主義に対する無知を批判し、その政治的社会的態度を妥協的であると攻撃することになる⁽²²⁾。

以上のような事情に照らし合わせると、ブルースの主張は実証主義者の基本的要求であることがわかる。しかし、芸術と社会の関係という観点でとくに興味深いのは、世論が最近の不健康な芸術論に冒されているという意見である。「他の国民がまず知識と意欲を増強させている間に、われわれは自己の内部に感情をかき立て、そそのかし、煽り立てることにやっきになっている。他の国民が、新しい交通路の敷設や、新たな貿易の振興に尽力している間に(中略)、われわれの追求するものは、美なるもの、の一点張りである」⁽²³⁾。

ブルースはドイツの唯物論哲学者ルードヴィヒ・ビュヒナーの説にしたがい、精神の病、頽廢はヨーロッパ全体に一般的な傾向であると認めるが、ポーランド社会の特性を指摘しつつ、ポーランド人に警告する。

他の国でも病的な芸術は一部の人々を巻きこんで、犠牲者を出す(中略)、社会はあまり大きな痛手を受けずにすむのに対し、わが国では重傷をこうむることになる。わが国では国民の意識(świadomość narodowa)なるものを決定する人々がこの上もなく常軌を逸した、信じられないような、きわめて病的な夢想到熱中しよう

としている。音楽、詩、小説、絵画、さらには学術論文にたずさわる時でさえ事情は同じである……⁽²⁴⁾

普遍的な頽廢の空気のはびこる時代であるが、ポーランドだけが「生存競争」に取り残されようとしているのは、ポーランドの世論形成に悪影響を及ぼす「新しい芸術」派の連中のせいだ、とブルースは示唆しているのである。

6. まとめ

ブシェスムイツキの挑発的な論文「芸術との闘い」の直接の反響としてはP.フミエロフスキ、W.ナウコフスキ、L.クシヴィツキ、A.ニエモイェフスキ、F.フェルドマン、M.ポスネル＝ガルフェイン、K.ラドスワフスキ、J.マルフレフスキ、C.イエツレンタらの論文があるが⁽²⁵⁾、ここでは、ブシェスムイツキに比較的近い立場にあると思われるナウコフスキと、逆に対蹠的な関係にあるマルフレフスキの論文にふれておこう。

ナウコフスキの「進化に対する『ヒメラ』」(「声」1901年10号)はブシェスムイツキの主張に対する擁護と批判の両方の要素をもっていた。「芸術との闘い」における民主主義糾弾や反動的な階級制度待望論、フランス革命に対する批判的な論調などは、当然ながら進歩的な社会活動家側からの非難を予測させるものであったが、ナウコフスキはその一因をブシェスムイツキの用語の不正確さに帰着させ⁽²⁶⁾、後者が待望しているのは「精神的階級制」であると好意的に解釈し、その真意とするところは結局、ナウコフスキらの「前哨」の立場と同じものだと考えた。「前哨」とは1895年にルプフで刊行された文学作品集で、題名の典拠となった集中のナウコフスキの綱領的論文「精神進化の前哨と類人猿(Forpoczty ewolucji psychicznej i troglodyci)」は、進化理論に依拠し、人類進化の先頭の位置にあるのは、神経質な人間(nerwowcy)つまり人並みはずれて感受性が高く敏感な人々だと主張した。「前哨」派は芸術家の神格化の先駆けとなったが、この点でもブシェスムイツキと共通しているといえよう⁽²⁷⁾。

ユリアン・マルフレフスキは1893年にローザ・ルクセンブルクとともに、前述のポーランド王国社会民主党を設立した国際的な労働運動活動家である。彼はミュンヘン滞在時に、ブシェスムイツキの批判する「民主主義者」として、「芸術との闘い」に対する反論「社会と芸術の関係に対するヒメラ的見解」(「真実」, 1901年19-20号)を書いた。

マルフレフスキは唯物史観に依拠し、芸術と社会の関係に対するブシェスムイツキの認識不足をプチ・ブルの「井のなかの蛙の見地(Froschperspektive)」と揶揄する⁽²⁸⁾。マルフレフスキによれば、「絶対の司祭(kapłan absolutu)」ブシェスムイツキが鬼の首を捕らえたようにやっきになっ

て、芸術の冒瀆者として名指しで批判しているトルストイやブルースの見解が不条理なことは明白で、もともと真面目に相手にする必要はなかった。前者は原始的フェチズムであり、後者は理想も文化も関知しないプチ・ブルの信条告白にすぎないからである⁽²⁹⁾。マルレフスキは、芸術の冒瀆者の出現は19世紀末に始まったことではないとして、芸術に対する圧迫の過去の歴史を概観し⁽³⁰⁾、社会の民主化（プシエスムイツキが芸術の水準低下の原因と考えたもの）によってこそ、ようやく、「芸術は余計なもの(zbytek)ではなく、精神の日々の糧であり、生活を美化するものではなく、生活そのものである」ことが一般に認識されてきたのだと強調する⁽³¹⁾。

「芸術との闘い」に対する多くの反論に対して「ヒメラ」誌はおおむね沈黙を守った。ポドラザ＝クフィヤトコフスカのいうように、論争よりも、時代の空気の解明を旨とする同誌にとって、それは当然の態度だったかも知れない⁽³²⁾。ともあれ、創作の領域において「若きポーランド」期の牽引者となったプシエスムイツキほどの派手さはないにせよ、プシエスムイツキが引き起こした理論面での論争は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのポーランド文学のモダニズム運動にとって避けることのできない「生みの苦しみ」だったのである。

注

- (1) ワルシャワの日刊紙「毎日新聞(Kurier Codzienny)」(1881 nr 271)掲載の〈W Pieninach〉(por. *Polski słownik biograficzny*, t. XXIX/1 (PAN, Kraków 1986) s.16.
- (2) Miłosz, Cz., *Historia literatury polskiej* (Kraków 1993) s.373.
- (3) Koc, B., *Miriam. Opowieść biograficzna* (Warszawa 1980) s.23.
- (4) ロシア政府当局の検閲対策として、プシエスムイツキは「国民(naród)」の代わりに「社会(społeczeństwo)」ということばを用いた。Por. *ibidem*, s.24.
- (5) Por. *Literatura polska, przewodnik encyklopedyczny*, t. II (Warszawa 1985) s.704.
- (6) Przesmycki, Z., *Wybór pism krytycznych*, t. II (Kraków 1967) s.7-10.
- (7) *Ibidem*, s.7.
- (8) もっとも注目すべき論文は、アブラモフスキ(Edward Abramowski, 1868-1918)の「芸術とはなにか」(1898年)であるが、これについては別稿で紹介する(東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室編〈Slavistika XI〉, 1995年刊行予定).
- (9) Por. *Programy i dyskusje literackie okresu Młodej Polski* (Biblioteka narodowa, Wrocław 1977), s. XXXV.
- (10) Przesmycki, Z., *op. cit.*, s.10-15.
- (11) *Ibidem*, s.13.
- (12) *Ibidem*, s.41.
- (13) Prus, B., *Kroniki. Wybór*, t. II (Warszawa 1987) s.14-19.
- (14) Por. Miłosz, Cz., *op. cit.*, s.337.
- (15) Uminski, W., *Nasi wynalazcy* (〈Prawda〉 1901 nr19).
- (16) Prus, B., *op. cit.*, s.14-15.
- (17) アンリ・ボグダン『東欧の歴史』(中央公論社 1993) 205頁.
- (18) Engels, F., *Przedmowa do wydania polskiego (Manifestu Komunistycznego)*, w: Saloni, J.K., *Pozytywizm* (Warszawa 1971) s.165.
- (19) ステファン・キェニューヴィチ編『ポーランド史 2』(恒文社 1986) 188-189頁.
- (20) Saloni, J.K., *op. cit.*, s.68.
- (21) Por. Miłosz, Cz., *op. cit.*, s.330.
- (22) Saloni, J.K., *op. cit.*, s.70.
- (23) Prus, B., *op. cit.*, s.15.
- (24) Prus, B., *op. cit.*, s.18.
- (25) 各論文の初出と要点については、次を参照：*Programy i dyskusje literackie okresu Młodej Polski*, s. XXXIX-XLII.
- (26) たとえば、ナウコフスキによると、プシエスムイツキは「民主主義」ということばを古い意味で使用しており、それは「今日のブルジョア社会」に相当する。ブルジョア社会は貧富の差をもたらした点が非難されるべきであるが、一方、今日の民主主義は能力開発の条件を各人に平等に付与しようとしている点で望ましい、とナウコフスキは述べる。Por. Nałkowski, W., 〈Chimera〉 wobec ewolucji, w: *Programy i dyskusje literackie okresu Młodej Poski*, s.330-331.
- (27) Por. *Literatura polska, przewodnik encyklopedyczny*, t. I (Warszawa 1984) s.269.
- (28) Marchlewski, J., *Chimeryczny Pogląd na stosunek społeczeństwa do sztuki*, w: *Programy i dyskusje literackie okresu Młodej Poski*, s.366. また、プジョフスキは『「若きポーランド」の伝説』において、同時代の芸術の歴史的必然性の欠如あるいは歴史からの遊離(bездziejowość, pozahistoryczność, niehistoryczność)を批判したが、それは「若きポーランド」の理論的指導者であるプシエスムイツキに対する批判点でもあった。Por. Brzozowski, L.S., *Legends Młodej Polski* (Lwów 1909) s.309-312.
- (29) *Ibidem*, s.365-366.
- (30) *Ibidem*, s.366-367.
- (31) *Ibidem*, s.368-369.
- (32) *Programy i dyskusje literackie okresu Młodej Polski*, s. XLIII.